

大震災を忘れない

13

もう一度あの時を振り返りながら これから取り組むべき課題を見つめたい

富山大学大学院医学薬学研究部 危機管理医学(救急・災害医学)
同附属病院 災害・救命センター 診療教授

若杉 雅浩

東北・関東地方の太平洋沿岸地域に甚大な被害をもたらした東日本大震災から二年あまりが経過しました。遠く離れた富山で日々の診療に追われ、ややもすれば

その日の夕方五時すぎに出発

平成二十三年三月十一日の震災時は、富山でもユラユラとゆつくりとした大きな揺れを感じ、遠隔地での強い地震発生が予測されました。富山大学は基幹災害拠点病院であり災害初動にあたるための災害派遣医療チーム(DMAT)を要しており、事前に訓練を受けていた隊員たちは直ちに救急部医局に参集し対策室を立ち上げ、情報収集・活動準備を開始しました。厚生労働省からのDMAT派遣依頼を受け、富山県とも調整のうえ十七時すぎ陸路、現地向けて医師二名、看護師二名、調整員一名の五名で出発しました。



大船渡市 津波のがれきで前へ進めない。(写真1)

この日、富山県内各地で大きな混乱は避けられませんでした。電話は通じず外部との連絡が非常に困難で、特に隣町の陸前高田市についてはTVニュース等で病院の水没が報じられているものの情報が全く入らないため、地元職員の内山道雄を抜けて陸前高田市へ向かいました。道中、山腹から眼下の陸前高田市内を見ると市街地は完全に破壊され、一面が泥に飲み込まれている状態でした。その市街地での救護活動を目指しましたが、がれきに阻まれ進入は不可能でした。約八〇〇名の被災者が高台の高田第一中学校の体育館へ避難している

DMATの救命医療は行えず その後は継続した医療支援へ

DMATは阪神淡路大震災の教訓から、災害現場へできるだけ早期に向いて救命医療を行うことを目的として設置されました。東日本大震災でも我々隊員は被災した方々の現場からの救命処置を想定して現場に赴きました。しかしながら現場には全く近づくこともできず、御遺体が泥まみれで自衛隊員により運び出され安置されるのを見守ることしかできませんでした。その一方で避難所に着の身のまま身を寄せている方々からは持病の常用薬を求められるものの、慢性疾患にたいしては我々の装備では全く対応することができず歯がゆい思いが募るばかりでした。



釜石市での避難所巡回診療 (写真2)

「想定外」の事態に対応する能力 そのための教育と訓練が必要

避難所巡回診療を行う中で被災者の方々からお話を伺うことで、急性期にDMATとして我々の行った実際の活動の乖離に気づかされました。救命医療を目的として現地に赴き当初の目的は果たせず、なすすべもなく帰還した私たちが、視点を考えればあの時に他にもするべきこと、できたことがあったのではな

四月に総合臨床教育センターを開設 災害医療の講習会にぜひ参加を

富山県は幸いにして、これまで大きな災害事例を経験することはほとんどなく、このため実際に自分たちが被災することへの危機感には乏しい傾向にあります。そんな我々こそシミュレーションで災害に備える必要があり、ぜひとも定期的な訓練を行い、各自の災害対応能力を上げていただきたいです。災害訓練を



「Eメール」による災害訓練 (写真3)

編集後記

アーサー・ピナードさんの講演を聴いた。日本語の詩人であり、熱心な反核活動家でもある彼の言葉を紹介します。原子爆弾は Atomic Bomb、核兵器も nuclear weapon の直訳、それに対しピカドンはヒロシマで生まれた。ピカは爆発の閃光熱線、ドンは衝撃波による音を表す。爆心地近くでは一瞬の光のあと、音より速い衝撃波に襲われた。それより外の人達がドーンという音を聞いている。このようにピカドンという言葉は科学的な裏付けもある立派な日本語だ。私たちがこの爆弾のことを言うときは、エノラゲイの操縦士やホワイトハウスのトルーマンが使った言葉ではなく、相生橋の袂から見上げた人の立ち位置で言葉を選ぶべきではないか。(S・M)